
一角紀 the Unicorn Era

佐井原 景

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一角紀 the Unicorn Era

【Nコード】

N8589F

【作者名】

佐井原 景

【あらすじ】

角有るものらが姿を現す動乱の時の訪れが、世界を大きく軋ませる。一角を屠る魔術の使い手は、身の丈腰ほどの小人であった。小人を伴う若き商人は、角有る娘と共に帝都を目指す。一方、北の大國に囚われるのは、無から宝玉を生む青年と『言葉』の異能を持つ少女。二人の囚人の手を取って、異端の王子は城を飛び出す。彼らは、世界の行く末をまだ知らない。◆PCサイトで先行連載中。少々書き直したのでこちらでも掲載しなおします。

序章 伝承

四方世界の全てにわたり、類似の伝承が確認される。
曰く、角有るものらが姿を現す、動乱の時があったのだ、と。

額に角を頂いた獰悪な生物が現れ、人を襲い、獣を食らい、木々を薙ぎ倒したのだという。

その姿は千差万別で、尚且つ多数に存在したようだ。あるものは地を駆け、あるものは天を飛び、また、あるものは海中に息をひそめていた。

けれどもただ一つ、どの口承にも文献にも一致するのが、それが額に頂く一本の角の存在だった。

故に、人はこう伝えてきたのだ。

——《一角紀》と。

第一章 西の宝玉 「1」

黄水晶が、内にかすかな光を宿している。

バクシダールがそのことに気付いたのは、海路に乗り出してから二月半が過ぎた頃だった。それは確かに怪異な現象であったが、年若い商人である彼にとってはそれ以上の意味を持つてはならないことだった。彼の役目は東の皇帝に荷を引き渡して後金を受け取ることであり、それ以上のものではなかったからだ。

帝国シャオⅡヤオは東大陸のほぼ全土を支配する。その皇帝が欲したのは、一抱えほどもある巨大な黄水晶の結晶であった。種々の鉱山を有する西大陸の販売網にさえも、圧力を掛けることの出来るのが皇帝の力だ。それは、一介の商人であるバクシダールからは遙かに遠いものである。

——さアて、どうしたもんかな。

三等船室の堅い寝台に横になったまま、バクシダールは黄水晶を納めた行李を見る。結晶を傷つけぬようと幾重にも布が巻かれているにも関わらず、籠の目からは仄かに光が漏れていた。間違いない、光は増し続けている。バクシダールは眉を寄せた。宝玉は呼吸する。巨大なものならばなおのことだ。それを阻害しないようにと、逃げ場のない船上では宝玉は行李に収められることになっている。だが、その慣例がバクシダールを苦しめようとは、取り決めたギルドのお偉方には知るよしもないことであろう。

西の品々を東へ運ぶ商隊の、一番の若年が彼であった。年嵩の商人らは、一等高い船室でいびきをかいている頃合である。騒ぎ立てれば彼らの機嫌を損ねようと分かっているからこそ、バクシダールには何も出来ない。

思えばその結晶は、採掘された当初より奇妙な魅力を帯びていたようだ。色水晶の中でもとりわけ稀少な部類に入る黄水晶が、皇帝が望むだけの大きさと透明度を兼ね揃えているなど奇跡に等しい。

黄水晶が洞穴の最奥で発見されたとき、バクシダールは調査隊に同行していたのだ。薄暗い洞穴の中でカンテラに照らされた結晶を、彼はよく覚えていた。そのあまりの見事さに、カンテラを持つ男の腕は震えていた。揺れる灯りに乱反射する黄水晶は、純度の高い黄金がそのまま澄み切ったようだった。

ほんの半年ばかり前の光景を思い出しながら、バクシダールは行李を見つめていた。こうして箱に収められてしまえば、もうバクシダールには封印を解くことなど許されない。たとえそれが何枚かの布と鍵の無い籠にすぎないとしても、手を伸ばせば触れることの出来る距離にあるとしても、二度と黄水晶を見ることは叶わない。

バクシダールには、東の皇帝と西大陸の巨大なギルド、双方からの処断を甘んじて受ける気はなかった。閉ざされた行李の中で起こっていることを考えてはならない。好奇心は身の毒だと、いくつもの故事が教えている。

薄ぼんやりと室内を照らす光は、ランプの代わりになるほどには強くない。けれど、バクシダールの安眠を妨害するには十分だった。怪奇現象はともかく役に立たないことは確かだ。封を解くわけにもいかず、青年は舌打ちして寝台の上で寝返りを打つ。行李に背を向けてしまえば、あとは湿っぽい船室の板壁が鼻先に迫るのみだ。

しかしそれでも、どうにも背がちりちりとする。それが不快で、バクシダールは再度苛立ちを籠めて舌を鳴らした。一度気にしてしまうと、その感覚は更に増す。ここ数日募るばかりの不快感は、そろそろバクシダールの限界を越えようとしていたのだ。

「……くそ……ッ」

一言吐いて、寝台からがばりと身を起こす。同時に船室が大きく揺れたものだから、柄にもなくバクシダールはぎょっとした。まるで、行李がその波を呼んだように感じたのだ。一度跳ねた己の心臓に、またしても苛立ちはいや増す。舌打ちをするのも悔しい気がして、バクシダールは力任せに毛布を行李に投げつけた。ばさりと毛布が行李を覆う。

——今度こそ。

そう思ったバクシダールが、無意識に詰めていた息をほうと吐いた時だった。

パキン

と。

石を商う者ならば、誰もが忌むべき音がしたのだ。

瞬時にバクシダールの頭からは血の気が引いた。苛立ちに煮えていた血が一変し、全身で氷に変わる。狭い船室に響いた硬質な音が、彼の鼓膜に突き刺さっていた。硝子よりも鈍い、けれども鋭利に澄んだその音を、年若いとはいえ場数を踏んだバクシダールが聞き違えるはずがない。

石英の結晶が、疵無き姿を失ったのだ。

シャオールヤオ帝自らの所望、ここまでの結晶を採掘するのにかかった経費、そもそもの黄水晶の希少性、黄水晶に生じる全ての価値が、バクシダールの胸中で積み重なってゆく。おそらくは小国の国庫を軽く凌ぐ価値を持つ石英の結晶が、今、この瞬間に、単なる加工材料としての宝石に変じてしまった。

知らず、バクシダールの歯はかたかたと鳴っていた。ひび割れた黄水晶をどれほど研磨し、金銀に趣向を凝らして埋め込んだとしても、東の皇帝は決して納得しないだろう。そのようなごまかしが似つかわしくない程に見事な結晶であることは、彼自身もその目で確かめたのだ。

まさか、と、必死で心を平静に御そうとした。石英が、そう簡単に碎けるなどということは有り得ない。耳に残る硬い音を忘れようとするように、バクシダールはかぶりを振った。もしも、もしも黄水晶の価値を失わせてしまったとすれば——十中八九、彼の命は無い。

西大陸のギルドの結束は硬く、そして非情だった。

やっとの事でそこまで思い至ると、バクシダールはぐくりと生唾を飲んだ。暗闇の中で毛布を被った行李は、彼を悩ませた仄明かりを失っている。しかし最早彼には、それが喜ばしいことだとは思えなかった。

「……落ち着け……」

震える声を敢えて発する。自分のものである筈なのにどこか遠いその声音は、いつも以上に掠れていた。

寝台から手を延べ、闇に慣れた目でランプとマッチを探り当てる。馴染んだ指の感覚を頼りにマッチを擦り、炎を灯心へと移せば、柔らかな光が狭い船室に満ちた。ガラスの中で安定した炎を見つめ、バクシダールは唇を噛んだ。とにかく、確かめなければならぬのだ。

寝台から腰を上げると、古い板がぎしりと音を立てた。息を詰め、足裏で床を擦るようにして、バクシダールは行李へとにじり寄る。毛布の上から籠の蓋に手を掛けて、そこでようやく細かい息を吐き出した。力を込めると、びり、と紙の破ける音が鈍く響く。これでもう、罪人だ。心臓の音が、耳のそばで聞こえる。

バクシダールははねのけるようにして、毛布と、蓋とを取り去った。

ランプに照らされた行李の中には、白い布がうずくまっていた。黄水晶に幾重にも巻かれている、最上級の絹であった。橙色を照り返す光沢は鮮やかで、質の高さを思わせる。常であったなら、バクシダールは嘆息していたことだろう。

だが、そうはならなかった。

バクシダールが認識したのは、その布がうごめいているという、ただ一つのことだったからだ。

「――なっ……!？」

彼は目を見開いた。ランプの灯火を受ける真白い絹が、もぞりもぞりと動いているのだ。錯覚か。そう思い、瞳をしばたたく。けれ

どもバクシダールの願い虚しく、布は——いや、布の中の何かは、懸命にもがいているようだった。

絹布は振れ、行李から溢れ、しゃらりと音を立てて船室の床に滑り落ちる。揺れる灯りに照り返るその色は、仄かな紅を帯びていた。けれど、バクシダールの視線は絹にそそがれてはいない。彼は行李の中だけを凝視していた。絹布を押し上げたのは、あろうことか細い腕だ。

幼子のように小さな手が、行李の縁をしっかと掴んだ。

——夢か、それとも。

瞬きを忘れたバクシダールの目の前で、細い指は更に強く行李を掴む。それを支えにしたのだろう、ふらりと陽炎のようなものが立ち上った。

ランプに照らされ、橙色の闇の中に浮かび上がったのは銀糸の頭髮。

陽炎と見えたそれは、人の形をしていた。

「なっ……な、な」

言葉を紡ぐことも出来ず、バクシダールは喉の奥で叫んだ。商才と共に磨いたはずの舌が引きつっていた。人の形をしている。だが、その影が人であるはずがない。封は解かれていなかったのだ。

ランプを差し出したまま氷像のようになっていた全身とは裏腹に、バクシダールの脳内には混乱だけが存在していた。ばらばらになった思考の中で、けれども視覚だけがはっきりとしていた。

人の形はしているけれど、それは、彼の知る人間とは違っている。小さな手に似つかわしい体軀は、しかし幼子のようなではない。均整の取れた若い人間を、そのまま縮めてしまったような姿だ。片手に掴めそうな小さな頭、背丈はおそらくバクシダールの胸にも届くまい。六つ七つの子供程だ。

白銀の髪の向こう側の双眸は、暗い紫を湛えていた。
小人。

「……小人の、卵？」

弾けるように思い出したのは、遠い昔に母の語った御伽話だった。

昔々砂漠には 幸せな国があったのです

ある日ある時その国の 王子が拾った大きな宝石

けれどもそれは 本当は 大きな卵でありました

大きな卵は三月で割れて 生まれてきたのは小さな小人

砂漠の王子と小さな人は 仲良く一緒に歌います

けれどもある日その国は 砂漠の中に消えました

小さな人と王子様 一緒にどこかへ消えました――

宝玉より生まれる、凶事を運ぶ小さな人。

荒涼たる砂原から国と人を消したというのは、果たして本当に御伽話であるのだろうか。

バクシダールの掠れた呟きに、初めて小人は反応をした。紫の瞳が、ようやくと光源に気付いたように彼に向けられる。灯火が映り込み、瞳に光が宿る。そこでようやくバクシダールは、それが人形ではなく生命を持っているのだと確信した。

まさしく、凶事を運んできたのだ。……砕けた卵の殻は、元に戻りはしないのだから。

第一章 西の宝玉 「2」

小人はバクシダールを見、そして、引き結んでいた唇をわずかに開いた。

何か、言葉を紡ごうというのか。

そう緊張するバクシダールを後目に、小さな人はふと俯く。行李を掴んでいた右手を離し、ゆるりとした動作で口元を覆った。ランプの濃い影の向こうでちらと動いたのは、小人の舌か。シャリ、とどこか硬い音がする。――鎖の音だ。小人は、鎖を吐いたのだ。

灯火に照らされたのは、鈍く光る銀鎖だった。小さな掌に吐き出されたそれを、小人自身もじっと見ていた。わだかまる鎖の中で、青が煌めく。鋭利なその輝きは、何かしらの宝玉であるようだった。

「ここは」

俯いたままであった小人が顔を上げる。手にした鎖と宝玉をゆっくりと握りしめながら、初めて発した声は、かすかだ。

「ここは、何処だ」

問われているのだ、とバクシダールが気付くには、しばしの時間を要した。小人はしばらく答えを待っていたが、困惑しているバクシダールはすぐには答えられない。待つのに飽いたのだろう、小人は未だ自らを囲っていた行李から飛び出す。その身にまもっていた、すり切れたケープがふわりと広がった。迅速な身捌きはけれど静かで、気付けば小さな影は音もなくバクシダールの目前にあった。

紫瞳が、ひとと青年を見据える。黒目がちな瞳は小さな頭の割には大きく、バクシダールの姿を鮮明に映していた。ランプを掲げる自分は、きつと酷い顔をしているのだろう。ふと、その時初めて冷静になった。ランプの作る陰影に浮かぶ、濃い隈を作った顔。唇は半分開いたままで、見開かれた両眼は充血しているだろう。脳裏に描いた滑稽な姿に、苦い笑いのようなものが込み上げた。

目を細め、喉をふるわせるバクシダールを、小人はじっと見つめ

ていた。表情は全く変わらないが、それでも訝しんでいるのが気配で分かった。信じられないことだが、今の今までめまぐるしく方々へ飛んでいた思考が収束してゆく。頭の芯が、冷えてゆく。

バクシダールはくつくつと笑いながら、手にしていたランプを壁に掛けた。いい加減に右腕は疲弊していたのだ。灯火は、高い位置から船室を照らす。

「ここは」

発した声はまだ涸びていた。軽く唇を舐めて、言葉が続ける。

「船の底だ。東へ渡る船の、ケチな三等船室さ」

いつもの調子を言葉に出してみると、それだけ舌が滑らかになるのが分かった。他者と語らう表層は陽気に、けれど心の深層は常に冷静であることが商人には求められる。バクシダールという青年は、確かにその性質を備えていた。

「東、へ？」

「シャオ〓ヤオさ。その行李には、皇帝からの依頼の品が入っていたんだが、なア」

胸中の困惑も憤りも全て押し込め、青年は唇の端をつり上げる。

卵の殻は何処へ行ったのか、そう問いたい気持ちをぐっと抑えて、バクシダールは口を開いた。

「――おい、小さいの、黄水晶は何処へ行った？」

発した声音は、思ったよりも低かった。平静になったつもりでも、まだ心中は穏やかではないらしい。問われた小人は、そこで初めてわずかに表情を変えた。ほんの少しだけ白眉が寄せられる。それは、小人がバクシダールの苛立ちに気付いたことを示しているようだった。

沈黙が、二人の間を支配する。

小人は言いあぐねているわけではないようだ。ただ、硬く唇を閉じたままだ。そこからは何の感情も見いだせない。怒鳴りつけ、掴みかかって怒りを表すことが出来ないわけではないが、バクシダールは何故かそうしたくはなかった。妙に落ち着いてしまった表層は、

厄介にも話術によるこの状況の打破を望んでいる。

苦笑いを浮かべたまま、溜息を一つ吐いた。

「だんまりかよ、小さいの」

揶揄するようにそう言えば、小人の表情が再び動く。促すように軽く顎をしゃくってみせると、観念したのだろうか、小人はようやくと唇を開いた。

「……風読だ」
かざよみ

「それが名前か？」

「名前ではない」

淡々とした物言いに、バクシダールは内心首を傾げる。いくらか饒舌になった小人は、更に続けた。

「『小さいの』ではない。《風読》だ」

聞き慣れない言葉だった。風を読む、という、それが名前なのだろうか。そう問おうと口を開いた、その時である。

どうん、という突然の衝撃に、バクシダールは舌を噛んだ。

「づ……っ!？」

激痛に口を押さえ、膝をつく。床板はびりびりと震動していた。一体何が。そう思うと同時に、再びの衝撃が船室を襲う。唇を噛み締めて呻き、痛みがいくらか和らぐのを待った。大波でもやってきたのか――いや、この断続的な衝撃は、攻撃の意思を孕んでいる。

「一角、か？」

血の味のする口腔の奥で呟き、バクシダールは涙をぬぐった。大きく揺れたランプは、幸い床に落ちることはなかったようだ。バクシダールの呟きに、己を風読と称した小人は表情を変える。眉根を寄せた険しい面持ちで、天井を仰いだ。

一角。それは、額に角を頂く獰悪な生物の総称だ。ここ数年で、それらは一気に出現数を増した。だからこそ、この船の航路は慎重に選ばれたはずであった。しかし、それも無意味であったというところか。

ずうん、と、三度目の衝撃があった。

ざわめきの気配がする。たたき起こされた連中が、混乱に陥っているのだろう。慌ただしい足跡が天井に響き、顎を上げていたバクシダールの頬には埃が落ちた。寝台を掴み、転倒を防ぐ。小人が現れたところの話ではない。それは生命の危機に直結する事態である。とにかくもランプをどうにかしようと、バクシダールが何とか身を起こした時だった。

ひょう、と、風がすり抜けた。

簡素な作りの鍵を一瞬にして外すと、白髪の小人は扉の向こうへと身をひるがえした。バクシダールは咄嗟に手を延べたが、はたらくケープを掴むことも出来なかった。出遅れたバクシダールはしばらくの間茫然としていたが、更なる衝撃に我に返る。巨大な何かは船底から突き上げるように、体当たりをしているようだ。

「畜生……！」

船底が破られるのは、もはや時間の問題であった。バクシダールはランプをひったくるようにして掴み、上着を羽織ってザックを背負う。彼の持ち物といえばそれだけだった。

浸水が始まれば、三等船室の階層は封鎖されてしまうだろう。そうなる前に甲板に出て、とにかく浮き輪の一つも手に入れば、乱暴に船室を飛び出したバクシダールは、狭い廊下を照らしながら駆けた。

駆けながら、しかし、ふと思った。

夜着姿の船客らが右往左往し怒鳴り散らしている今ならば、ここから抜け出せるのではないだろうか。

行李が空であることを同行の商人らが知る前に、姿を消すことが出来るのではないだろうか。

でっぷりと肥った中年の男を押しつけて、甲板へと続く階段を駆け上がる。階層が上がるにつれて、喧噪は更に近くなった。激しい水音と怒号が混じり合い、繰り返される衝撃の度にそれが膨れあがる。ランプをしっかりと握り締めて、バクシダールは跳ねるようにそこへ向かった。

身の軽さには自信があった。甲板の喧噪に紛れさえすれば、岸辺からそう遠くない場所に停泊しているこの船から、人知れず抜け出すことも出来るだろう。そう考え上層を目指すうちに、潮を孕んだ外気が鼻先を掠めてゆく。階段での押し合いは、一際死に物狂いの感を増してゆく。

——小人は、この場所を越えていったらうか。

誰かに突き飛ばされそうになったところを何とか避けて、バクシダールは思った。真白い髪をひるがえした小人の行動は、おそらく誰よりも早い部類に入っただろう。しかしこの騒ぎの中で、よもや踏みつぶされたのではないか。

——だとすれば、腹いせにはなるかもな。

けれど、そう上手くはいかなかった。

ようやく甲板へと顔を出したバクシダールは、途端、海水を頭から被った。突然のことに鼻から塩水を吸い込んでしまい、ひりつく喉から何度も咳き込む。そうしているうちに後ろから来た連中が、苛立ちに任せてバクシダールの背を押すのだ。這うようにして甲板の隅に寄り、額に巻いていた布で顔を拭いた。痛み、霞む目を何とか開いてランプを見ると、火は既に消えてしまっていた。

しかし、ランプなど必要がない程に、月は煌々と照っていた。月光をくまなく受ける甲板では、水夫達が怒号を上げながら行き来している。客のある者はおろおろと辺りを見回し、ある者は浮き輪の奪い合いをしている。そういった喧噪から隔絶され、バクシダールは座り込んでいた。肩で息をしながら、ゆっくりと視線を巡らせる。これだけ大きな船なのだ。浮き輪が足りないということはないだろう。冷静になってみさえすれば、いくらでも助かる手段は残されている。

そう思おうとした瞬間、更なる衝撃が響く。

ばぎょん、と、木材のたわんで碎ける音が、した。

これまでか、そのような思いが胸を過ぎった時だ。果たしてデッキの壁面に、つり下げられている浮き輪を見つけた。バクシダール

は即座に駆け寄り、麻縄で結わえられたそれを手に取る。よく乾いた木で出来た浮き輪は驚く程に軽かった。

あとは、一角の死角をくぐり抜けることが出来さえすれば上出来だ。そう思ったバクシダールが、ふとデッキの上に目を遣った時である。

小さな人影が、月明かりを受けて白く輝いているのを、見た。

デッキの天板を踏み締めている風読は、一段高い位置からじっと海上を睨み据えている。ケープと長い白髪を夜風に揺らす、その横顔は険しかった。

思わず息を呑んだバクシダールの気配に、気付いたのだろうか。

小人は、彼の方へと顔を向けた。

『風が、無い』

小さな唇が紡いだ言葉が、何故かバクシダールの耳元でした。

「風はいくらでもあるだろう！」

思わず叫んでそう返すと、小人が首を横に振ったのが見えた。では何故お前の髪は揺れているのだ、と、問うてやろうとしたバクシダールだったが、それより先に小人は再び海面へと目を遣ってしまった。気の無い態度に苛立ちを覚えるが、しかし――次の瞬間にその感情は霧散した。

――ドゥン！

鈍い、弾けるような音と共に海上に現れたのは巨大な水柱。

月を食らおうとするように顎^{あぎと}を広げ、角有る水蛇が伸び上がったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8589f/>

一角紀 the Unicorn Era

2010年10月10日02時27分発行